

佐藤一斎著「言四誌録」岩波文庫、岩波書店、1935 年 6 月 30 日刊、2014 年 2 月 19 日第 15 刷を読む

三二八

人生は二十より三十に至る、方に出づるの日の如し。四十より六十に至る、日中の日の如し。盛徳大業、此の時候に在り。七十八十は、則ち衰頹蹉跎^{さだ}して、將に落ちんとする日の如し。能く爲す無きのみ。少壯者は宜しく時に及びて勉強し以て大業を成すべし。遅暮の嘆或る罔くば可なり。

*蹉跎^{さだ}…つまづくこと。また、時機を失うこと。

*遅暮…日暮れて前途なきをいふ。

P294

[コメント]

佐藤一斎先生の「言四誌録」の 4 巻の中の最後の書、80 歳のときから書き始めたといわれる「言四耄録」の一節(第 328 章)。人生のおよそ 20 ～ 30 歳代は「方に出づるの日の如し」、およそ 40 ～ 60 歳代は「日中の日の如し。盛徳大業」、およそ 70 ～ 80 歳代は「落ちんとする日の如し」。20 ～ 60 歳代までの少壯者は「宜しく時に及びて勉強し以て大業を成すべし」。70 ～ 80 歳代はもっと勉強し、精神は少壯者であるべきかも。

「言四誌録」は日本の古典の中で最も読み継がれた名著。一章一章じっくりと読み込み、自分のものにしたい。この 2 月に岩波文庫で復刊されたので、是非御一読を。

— 2014 年 2 月 13 日 林 明夫記 —